
アトラクション

洸淋寺 凧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アトラクション

【Nコード】

N1469D

【作者名】

洸淋寺 凧

【あらすじ】

ある日私は友人の治子と遊園地に行った。しかしそこで待ち受けていた物とは死のゲーム。果たして二人は生きていられるのか！？

二千××年×月××日・・・この日は何の日か分かりますか？
この日は私にとって忘れられない、忘れてはいけない日だ。

その日、私、木倉可憐きくら かれんは友人の治子はること一緒に東京の中心部にある遊園地へと行った。朝早くに起きたかいがあつて着いたのは開園前で、入口には数名しかいない。その人達は皆、私達と同じ目的で早くから来ているのだらう。

「イータランド楽しみだね」前にいる小さな女の子とそのお母さんが話している。やはり目的は私達と同じイータランドだ。

イータランドとは大人気のアトラクションだ。エレベーター式の部屋に入るとそのまま部屋が上がっていく。そして一番上まで着くと一気に急落下するのだ。

「そんな物が？」と思う人がいるかもしれないがこれに乗るには一日二百枚限定のファストパスを手に入れなくてはのれなく、ファストパスのために皆が私達のように開園前に入口に並ぶのだ。

やがて入口が係員によって開けられると、私達はイータランドに向かつてダッシュする。

「キャッ！」後ろで治子が悲鳴を上げる。誰かにぶつかったのだらう。

「治子、早く！」

ようやく私達はイータランドの前に到着した。しかしいつもはいるファストパスを配る係員がいない。

「可憐、あれ見て！」治子の指す方向には立て看板がある。

『本日イータランドは午後一時からの開始となっております。午後一時に再度いらっしゃって下さい』

「ええ、せつかく朝早く起きて来たのに」治子ちこがその場に座り込む。

「ま、午後一時に来よ！」

そして私達は午後一時までにいろいろなアトラクションに乗った。イータランドが開いてなかった時の事なんて忘れてワイワイ楽しく午後一時までの時間を潰す。

そして午後一時・・・私達はイータランドまで朝同様ダッシュで行く。イータランドに着いたがやはりファストパスは配っていない。しかし私は入口が開いているのに気が付いた。

「きつと今日はファストパス無しの入場なんじゃない？」私がそう言った時だった。

ピン、ポン、パン、ポン……。

「当、遊園地に御来場の皆様へ申し上げます……。ただ今からゲームを始めたいと思います！ゲームとは、仕掛けの施された各アトラクションに乗り、全てをクリアーして下さい。クリアー出来なかった場合……。そこには死が待っているのでご注意ください！」

死が待っているという言葉が頭の中でリフレインする。同時に早くここを出ようという気持ちが込み上げて来た。

「ちなみに、今からの入退場は出来ません。無理にでも出たり入ったりしようとする場合、命の保証はありませんのでご注意ください」

ピン、ポーン、パーン、ポーンという音と共に場内アナウンスが消えた。

「死んでたまるかあ！」皆が口々に言う。そして一人の男がついに行動に出た。入口目掛けて突進したのだ。

しかし男は呆気なく取り押さえられ、地面に叩き付けられた。やがて一人の係員がやってきた。手に何かを持っている……。バチバチと音が鳴る。スタンガンだ！そして男の首元にスタンガンを持って行き……。

それから皆は逃げる事を諦めたようだ皆の歩は、次々にアトラクションへ向かう。私はとりあえず、近くにあったコーヒーカップに乗り込む。コーヒーカップに乗ると係員に

「最後まで無くさないで下さい」と言われた。そしてクラクションが鳴り響き、ゆっくりとコーヒーカップは回っていく。

二回、三回、四回と回るうちに私は違和感を感じた。

「ねえ治子、何だか早くなってない？」私はなんだか回転が早くなっているように感じたのだ。

「そんな事ないんじゃない？でも安心したよ、いきなり変な事言われておまけに人まで死んじゃったんだもの！でも全部きつとお芝居だったんだよね？」最後の方は確信では無く願望であつたのだろう。言い切つた割には全く安心していない。その時、いきなりコーヒーカップが止まつた。

「お、終わつたの？」思わず安堵する。しかし神様は私達を見放した。再びコーヒーカップが回り始めたのだ！しかも超高速で。

「キヤー」と周りから悲鳴が聞こえる。あのアナウンスが言つていたクリアーとはこれにたえろという意味なのだろうか？

ピーン、ポーン、パーン、ポーン……。コーヒーカップにあるマイクからアナウンスが……。

「このコーヒーカップは、一組以外のカップに乗つた方全員が気絶するまで回り続けます。なお、残つたカップの人は次に進んでいただき、気絶してしまつたカップの方は直ぐさま領収所へ連行し、死が待っていますのでご注意下さい」そしてまたピーン、ポーン、パーン、ポーンと鳴り、アナウンスは切れた。

私が周りを見渡すと、隣のカップの人はもう気絶しているようだ。つた。

「私……。もう、駄目かも……。」あれから二十分が経つただろうか、突然治子が言い出す。私が治子の側によつてみると治子は首をかくがくさせ始めた。

「可憐……。可憐は、生き残るんだよ……。」「不意に治子が言

い出したので私は

「きつと皆助かるわよ！あんなのただの悪戯よ！」と言った。しかしそうは言ったものの私の頭では逃げようとして殺された男の事を思い出してしまう。同時に「これは悪戯で済まされるようなものじゃない。これは立派なテロ行為だ！つまり私達はそれに従うしかない」と不安が湧き上がる。

「ただ今、三カップを切りました！」アナウンスが流れる。あと三カップ・・・私達を入れないであと二カップ。

「ただ今、一カップが脱落しました。あと二カップです！」五分後、遂に残るは二カップとなった。自分と相手のマンツーマン。

「治子！後一カップだけよ！頑張つて！」小さい頃から私は鉄棒の空中逆上がりばかりやっていたせいか自然と全く気持ち悪くならない。

「ただ今優勝が決まりました！」コーヒーカップが止まった。日は既に傾いている。夜になってしまったが、どうするのだろうかと思っていると「次に行かないと死ぬよ」と、係員に押されたので一夜通しでやるのだろうか。私はそんな事を考えていたが治子は限界のようで地べたに寝転んでいる。

次に私達が向かったのは船に乗ってシューティングゲームをするガンテズナイパーという3Dメガネをかけて映像の敵を撃つゲームに行った。しかし撃つだけならいいが敵が攻撃をしてくる時があり、攻撃を受けると船がそれに応じて動き、怖いのだ。しかし、今回は3Dメガネをなぜかかけなかった。おまけにいつも渡されるはずの光線銃は渡されず、本物の銃らしきものと弾が渡された。

「可憐、こ、これって本物なんじゃ・・・？」

「これは一見本物に見えるがモデルガンなんだ！」直ぐ前にいる男

が言った。

「オレ、慎也しんやつてんだ！よろしくな！」

「わ、私は可憐。そしてこの子が……」

「は、治子です！」私は治子がまだ引きずっているのかと思ったがこれなら問題無いようだ。

「慎也さんはいくつですか？」

「十六だよ！」

「高校生ですか……」

「そうだよ！痙攣高校さ！」痙攣高校とは平均偏差値70代の学校である。彼らの知能を見た人々が痙攣する事から痙攣高校と名付けられたらしい。

「そろそろみたいだ……」前を見ると三つ前に三人掛けの船に乗り込む人の姿があった。

「君達とは同じ船に乗るみたいだね！」

遂に私達三人の番が来た。

「いよいよだね……」それが合図にでもなったのかそれと同時に動き出す。

中に入って行くと、鼻にツンとする臭いがした。

「血の臭いだ……」慎也さんに言われて下を見るとブカブカと腕が水面に浮いている。下を覗いていると何かがいる。

「危ない！」私は慎也さんに引き込まれた。

「何するんですか！？」と言うと慎也さんはあれ、とさっきまで私のいた場所を指す。そこにはワニの姿が……。

「なるほどね……」

「何がですか？」

「このゲームのルールだよ！」

「私も分かったわ！普段は映像の敵を光線銃で撃つのだけれどもここでは本物の猛獣と戦うのよ！」

バーチャルモンスター

「頭がいいね、治子さんは！」慎也さんに言われ、治子はちよつと得意そうだ。

「まずはこのワニを撃とうかな・・・」そして慎也さんはモデルガンを弾を詰める。

「あら？陸地になつてる・・・」

あれから私達は荒れ狂うワニ達と撃ち合った。しかし進むうちになぜかいつもは無い陸地が有った。

「やはりここは改造されているらしいな・・・」仕方なく私達は陸地に足を踏み入れる。

「助けて下さい！」しばらく歩いていると牢屋のような場所に閉じ込められている人を見つけた。

「どうしたんですか？」

「あ、ああ・・・私はこの遊園地の管理人なんだ！二日前に『T H A K』と名乗る奴らやつて来て私に二日後ここでイベントをした
ザウ
いと思つていると言つて来たんだ。それで私はそのイベントの企画書を見たんだ。しかしその内容が大変なものでな・・・」

「十分分かりますね」慎也さんは嫌みらしく言った。

「ああ、分かっているな・・・どうやらT H A Kの奴らは本気で実行したみたいだからな・・・」

「企画書にはなんと書いてあつたのですか？」

「二千×年×月×日にこの遊園地で命をかけたゲームをすると言うのだ。ゲームのプレイヤーはこの遊園地に今日来ている人全て。ゲームのルールは改造されたアトラクションを全てクリアした者。期間は三日間でその間に全てクリア出来なかった者は全員殺すというのだ・・・そして今朝私起きるとここに閉じ込められていたのだ」

「そうですか・・・こここの遊園地にはアトラクションがいくつありますか？」

「三十五つだ」私達はとりあえず（慎也さんは分からないが）二つのアトラクションを見た。つまりまだ三十三はやらなくてはいいい。

「ガルルルルル……」後ろで何かの泣き声がする。私はそつと後ろを見た。

「ら、ライオン!?」私達の後ろにはライオンが目を光らせている。「何!」慎也さんがモデルガンを撃つ。が、ライオンの動きはそれよりも早く治子を取り押さえる。

「か、可憐助けて!!」

「ま、待つてて!」といい私も銃を構える。

「今だ!」慎也さんの合図で私は引き金を引く。

バン!重たい音がしてガスガンから弾が発射される。しかし私の弾は大きくそれで遠くに生えている木に当たってしまった。

「ギャウ!」ライオンが悲鳴を上げる。慎也さんの弾が当たったのだらう。

「やった!」そう思った。しかし全然よくない結果を私は目の当たりにする事になった。

「グルルル……」怒ったライオンは私に向かってジリジリと歩を進めていく。

「ギャオ!!」距離が一メートル位まで追い詰められた時だろうか、ライオンが私に向かって飛び掛ってきた。私は思いつきり目をつぶる。痛みは無い。私はそつと目を開ける。

「し、慎也……さん」私の目の前にはライオンに腹を掻き分けられた慎也さんと血だらけになり倒れているライオンの姿があった。「慎也さん!」しっかりしてください!」

「慎也さん!!」治子も側に来てひたすら慎也さんの名を叫び続けた。

「二人とも……最後まで生きるん……だ」そしてこれが私達の最後に聞いた慎也さんの声であった。

「出口よ!」目の前には大きな穴が開いていて外が見える。

「慎也さん……」治子がつぶやく。

「治子、慎也さんのためにも最後まで諦めないわよ」

「当たり前じゃない！」

空はもう真つ暗。私はじめじめとした夜風に不気味さを感じた。

「どうぞ」後ろから係員がコーヒークップの時に貰った紙と同じような物を渡してきてくれた。

「とうとうこれが最後になっちゃったわね」

今私達の手には三十四枚の紙がある。この紙はこれらのアトラクションをクリアしてきた証なのだそうだ。残るは一枚。この遊園地で一番恐ろしいといわれるイータランドだ。

「行くわよ……」

「ええ……」そして私達はイータランドへ歩いていく。

私達がイータランドの中を歩いていくとやがて一つの部屋にたどり着いた。部屋は狭く椅子が四つ取り付けられているだけ。ここからゲーム開始だ。

私達が部屋に入り、扉が閉まるとガコンという音と共に体に圧力がかかる。

「只今、頂上に付きました。高さは高度六十メートルです」アナウンスが流れる。

「今からがゲーム開始です。取り付けである椅子に座り、シートベルトを締めてください」

私達がシートベルトを付けるとまたアナウンスが流れた。

「今からこの部屋は壁という壁が全て外れます。しかしシートベル

トが外れる事はありませんので落ちる心配は要りません。ここでゲームのルール説明です。この部屋は壁が外れると同時に落下します。後はシンプルに運です。ここの座席の三つは死の席です。落下途中に必ず死にます。座席はもう変えれませんので・・・では、オープン！」そして壁がめきめきと音を立てて外れる。そして・・・。「きやあああああああああああああああああああああああああああああああ！！」落ちていく。落ちていく・・・。

ようやく地面に着いた。

「よかったね・・・治子・・・」と、横を見た。しかし横には首の無い治子がいる。そう・・・ルールはルールだ。

「治子・・・治子・・・治子！！！！」私は慎也さんの時のように治子の名前を叫ぶ。

「おめでとunggざいます・・・あの」後ろから係員から紙を渡される。

「これでタイムアップとなりました。これから紙の確認をします。全てのアトラクションをクリアした方、三十五枚の紙をお持ちの方は入り口まで来てください！」

私は入り口に向かって歩を進める。死んでいった皆の思いを背負って。

「全て集まりました」私はそう言って入り口の係員に全ての紙を見せる。

「OKです。これから閉会式を始めますのでイータランドの前に行って下さい」

イータランドの前に着くとそこはさっきまでの雰囲気とは打って変わり色とりどりの飾りで飾られていた。ふとイータランドの係員を見つけ、目で合図を送る。

「それでは、閉会式を始めます。まず、企画考案者THAKさんのお話です」これじゃあ小学校の朝会と同じだ。

そしてTHAKの話が終わり、生還者の発表がされた。

「木倉可憐さん、山田達也さん、前の表彰台へどうぞ……」私は階段を一步一步確実に上る。

「生き残った感想はどうですか？」

私はTHAKの方を向く。

「THAKさん」

「何だね？」

「死んでください」パン！と辺りに銃声が響く。

あの時、私はイータランドの係員にTHAKを殺してくれと頼まれ、本物の銃を渡された。これで殺されたって私に悔いは無い。何せ皆の仇を伐てたのだから。

そして私は血にまみれて地面に崩れて行つた。しかし私を殺したのは係員でなく私と同じく生還者の山田達也だった。

「何故……？あなたは……」そこで力尽きてしまった。

私は今から行くからね、治子！……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1469d/>

アトラクション

2010年10月8日15時07分発行